新たな国際危機と日中関係

昨年来、日韓両国関係は韓流ブームに沸き、急速に友好ムードが高まっている。前世紀前半の日本による朝鮮半島植民地統治の歴史の恩讐を越えて、日韓両国はなお歴史教科書や竹島領有問題を残しつつも新しい共同文化の構築に向かって進み始めたように見える。一方、日中両国間には依然、いわゆる「政冷経熱」の堅いタガがはまっており、政治的な関係は冷え切ったままで、改善の兆しが一向に見えない。なぜ日中関係には日韓関係のように改善の方途が容易に見出しがたいのか？

冷戦からポスト冷戦へ理想主義の再台頭

主因の一つは冷戦崩壊後の国際秩序の変化を上げることができる。第二次世界大戦当時、国際社会は反ファシズム連合諸国と枢軸諸国の二つに分かれ、聖戦的意識に支えられた価値規範的な理想主義（アイデアリズム）を基調とする善悪二元論に支配されていた。第二次世界大戦後、こうした理想主義は当初、一九四六年三月のチャーチルの「鉄のカーテン演説」によって自由主義陣営と社会主義陣営の東西対立を同様の聖戦意識によって支配する原理として用いられようとした。しかし当時、在モスクワ米国大使館駐在の外交官だったジョージ・ケナンがワシントン宛ての「モスクワからの長文電報」を打ち、さらに一九四七年七月号の「フォーリン・アフェアーズ」誌にペンネームXで「ソビエトの行動の源泉」と題する論文を発表して、聖戦意識に支配された価値規範的な理想主義を否定してのち、勢力均衡論（パワーバランス）に基づく現実主義（リアリズム）の国際秩序が形成された。この秩序はその後、次第に冷戦体制と呼ばれるようになった。以後、一九八九年一一月のベルリンの壁崩壊とマルタにおける米ソ首脳会談によって冷戦が崩壊するまでこの現実主義原理による秩序が持続したのである。

冷戦崩壊後の国際秩序は当初は容易に新たな秩序原理が見いだせぬままに推移したが、ブッシュ・シニアの政権からクリントン政権を通じて変化が生じた。具体的には八九年のフランシス・フクヤマの「歴史の終わり？」や九三年のサムエル・ハンチントンの「文明の衝突？」などが予見したように、徐々に現実主義が後退し代わって再び価値規範的な理想主義が台頭し、ついにブッシュ・ジュニア政権の登場とともに本格的な聖戦意識に支えられた理想主義の支配する時代に復帰するに至った。アフガン戦争、イラク戦争のいずれもがイスラムの側にも、また米英を中核とする連合軍の側にも、強烈な聖戦意識が働いていることは明白である。

アレキサンダー・ウェントと時殷弘

こうした聖戦意識の下では、善悪二元論に立つ「観念」の働きが国際政治

を動かす力として強まる結果になる。この点を強調して九〇年代末に登場したのがアレキサンダー・ウェントの「構成主義」（constructivism）にほかならない。冷戦時代に勢力均衡を支えた現実主義的な国力（パワー）の概念は遙かに後退し、現在では理想主義的な観念（政治的また文化的）の政治作用が極大化する時代が訪れている。

こうした新たな状況下に、日中関係はどのように推移しつつあるか？　そこでは当然に時代の影響を受けて、政治的、文化的な観念の作用がいっそう強まる結果になる。本号に登場する中国の国際政治学者の時殷弘教授は、冷戦時代までの現実主義に立って、観念的要素の強い「歴史認識問題」を棚上げし、日中両国相互の国益の最大化を図るべきだとする「対日新思考外交」を提案したが日中のいずれからも受け入れられることがなかった。時教授は「歴史認識問題」に過度に拘泥することが両国の国益を損ない、かつ安全保障上の不利益をもたらしていると考えたのである。

理想主義的政治観念について言えば、中国の政治体制はなお共産党による一党独裁体制をとっており、日本の自由主義政治体制とは本質を異にする。いわば自由主義と反自由主義の政治観念の違和がそこに存在している。これに加えて同じく政治観念領域に数えられる「歴史認識」の問題が重なることによって、日中両国間には極めて根の深い観念の違和が働く状況が作り出される結果になっている。むろんこうした観念上の違和は前世紀半ばから一貫して存在しているのだが、今世紀に入って国際政治における政治観念の作用が極大化するにともなって、より深刻な日中の政治対立を呼び起こすようになったと私は考える。

理想主義支配下の日韓関係と日中関係

これに比べて日韓両国間には政治的、文化的な観念領域における共通性が時代とともに急速に増大するに至っている。「韓流」文化はまさにそれを象徴するものと言える。こうした観念の共通性の形成はついに観念的違和の根源を長きにわたりなしてきた「歴史認識問題」を上回るほどまでになった。

観念領域の作用が重大なのは、それが単に国家レベルに止まるものではなく、むしろ国民のグラスルーツ・レベルをも支配するからである。事実、日中間の現在の対立は明らかに国家間から国民間の対立にその磁場を移しつつある。それだけに日中関係の危機はその深刻度を史上かつてないほどに高めていると言わねばならない。

こうして私たちが直面する課題は、日中両国民間に共通の融和をなす新しい政治的、文化的な観念を構築することにほかならない。

（加々美光行）